

## 座長総括 (376~380)

ト部 元道

演題 376 席は十二指腸球部に組織学的に完全な胃底腺組織が見られる、いわゆる異所性胃粘膜がびらん性胃炎を高率に併存すること、十二指腸炎のみられたことを重要な知見として述べた。いずれも隆起型を示した病変で、球部の隆起性病変を診断ならびに鑑別するに有意義な報告であった。

演題 377 席は演題 376 席と同じような症例であったが、異所性胃粘膜が十二指腸第 2 部に多発した多彩な内視鏡像を示して、色素内視鏡法（メチレンブルー、コンゴーレッド）を用いた診断について述べた。従来の研究で、異所性胃粘膜について報告したものは、切除胃標本による検討であり、必然的に十二指腸球部に関するものであった。近年、パンエンドスコープの普及により、広く十二指腸を検討した報告が増加すると考えられる。

演題 378 席は十二指腸腺腫に対する検討が示された。近年、症例の集積とともに、十二指腸の腫瘍様病変、腫瘍について、病理組織学的知見が詳細に報告されるようになった。今後、腺腫、腺癌、非上皮性腫瘍といった多彩な病変が内視鏡的切除手技によって、さらに明らかにされると思う。

演題 379 席では終末回腸を大腸ファイバー検査でスクリーニングした際、発見された微小表面型（IIa + IIc 様）小腸腺腫 4 例の呈示があった。すべて径 5 mm 以下の腺管腺腫であり、小腸においても Adenoma Carcinoma Sequence がみられるのか興味深い。今後の報告を待ちたい。

演題 380 席では十二指腸乳頭部の Gangliocytic paraganglioma 症例の呈示がなされた。極めて稀な症例であり、本邦では 10 例前後の報告である。多彩な組織像と共に、免疫組織学的にも種々のホルモン物質が検出されており、興味深い。

## 381 日本住血吸虫の関与が考えられた幽門狭窄の 1 例

国立精神神経センター国府台病院 消化器科

○真坂 彰・田中 守義・奥田 桂子

毛利 勝昭

同 外科

飯塚 一郎

同 臨床検査部

杉山 誠

症例は、68 歳男性。山梨県出身。

平成 6 年 1 月、腰椎圧迫骨折で他院に入院。消炎鎮痛

剤の投与を受けていた。入院 6 カ月後に食欲低下し嘔吐を繰り返すようになり、9 月 1 日当院転院となった。

入院時上部消化管内視鏡検査にて多発胃潰瘍を認め、薬物で加療した。潰瘍の治癒と共に幽門前庭部が狭窄したため、広範囲胃切除術を施行、切除標本から日本住血吸虫卵が見つかった。標本を全割し虫卵の分布図を作製したところ狭窄部から幽門輪にかけ多く分布し、胃体部にも一部、潰瘍瘢痕と一致し分布していた。

狭窄の原因として、潰瘍の治癒過程において虫卵が影響したと考えられ、報告した。

## 382 胃アニサキス症 119 例の検討

—1986 年より 1995 年度 10 年目までについて—

浜岡総合病院 内科 ○柴田 晴通・座光寺 哲  
東海大学内科 6

鄭 義弘・高安 博之・反町 仁一  
浅野 健・柴田理佳子・三輪 剛

1986 年 7 月より 1995 年 8 月までの間にアニサキス症が強く疑われた 140 例に内視鏡検査を施行し、119 例に胃アニサキス症を認め摘出した。患者は 10 歳代から 70 歳代に及び、40 歳代の男にピークを示した。症状は急激な上腹部痛で発症し、強弱の反復が特徴的であった。魚介類摂取後 12 時間以内でほぼ全例に症状の発現がみられたが、内視鏡検査摘出（患者が受診までに要した時間も含め）までの期間は 36 時間以内が 90 件であったが、逆に 4 日 8 件、5 日 6 件、6 日 1 件もあった。原因の魚はイワシ 75 件で 1 位だった。まとめ：アニサキス症は詳細な病歴と症状が重要で、摂取後 4 ~ 5 日でも胃内に生存していることより、疑えば積極的な内視鏡検査が大事である。

## 383 傍乳頭憩室の臨床的検討

順天堂大学 第 1 外科

○溝渕 昇・ト部 元道・船曳 均  
三島 吾朗・林田 康男・榎原 宣

憩室開口部の中心が主乳頭から 15 mm 以内にある傍乳頭憩室 106 例を対象とし、憩室開口部が主乳頭または口側隆起に接するもの 46 例（A 群）と主乳頭または口側隆起から離れたもの 60 例（B 群）に分け、臨床的に検討した。胆管および脾管の造影所見をみると、A 群で胆石兼総胆管結石症 7 %、総胆管結石症 15 %、総胆管の拡張のみ 13 %、慢性脾炎 33 %、B 群で胆石兼総胆管結石症 2 %、